

## ドイツ・ロマン主義の形成と政治思想史上のその特徴

竹原, 良文  
九州大学法学部教授

<https://doi.org/10.15017/1559>

---

出版情報 : 法政研究. 34 (5/6), pp.1-21, 1968-03-20. 九州大学法政学会  
バージョン :  
権利関係 :

## ドイツ・ロマン主義の形成と

## 政治思想史上のその特徴

竹 原 良 文

一、はしがき

二、ロマン主義形成の比較方法的研究

三、政治思想としてのその特徴

(一)

ロマン主義は文芸思想の上では現代思潮——ことに十九世紀前半を支配した文化形態としてきわめて重要視されており、その研究もまたさかんであるが、政治思想の観点からは、あまり価値のない、研究対象としては無意義な觀念諸形態の一種として無視されがちである。文学と政治の問題であるけれども、文芸運動の政治的意義はこれまで政治運動にとつてはむしろ負担、障碍でこそあれ、積極的価値はあまり評価されないという事情のために、政治研究の一環としてはほとんど取りあげられなかったと云つてもよからう。ことにロマン主義運動はフランス革命に対する反動、あるいは保守主義として理解される面が多いので、民主主義的風潮の中では積極的にかような保守反動の政治思想研究の機運もなかなか動かなかつたことが、この分野における研究をとぼしいものとしたこともまた指摘されるだろう。さらにロマン主義思想自体、後にその諸特徴と政治思想との関連を明らかにするところでわかるだろうように、科学

的・合理的対象把握を学問的に高く評価しつけている吾々にとっては、ロマン主義の無体系・無構造とも云えるような発想方法で政治へアプローチする仕方は、全く異質的に感じられて、非合理的要素を実践的要因として把握する方法を欠いているために、むしろロマン主義は政治的認識の彼方へ追放されてしまうのであろう。

このようにロマン主義の複雑多様な性格、個別的特殊側面の主観主義的強調、無体系的、断片的発想などは、その総合的評価をきわめて困難なものとし、研究者によって、かつまた批評家の時代に応じて、その各実践的立場に従って、評価基準は不同であり、相反している。

文芸史評論家の場合においてもあるいはその暗影の側面が重視され（H・ハイネ『ドイツ・ロマン派』）、あるいはその積極的モメントが高く評価される（R・ハイム『ロマン派』）。政治的ロマン主義、あるいはロマン主義的政治―文学から政治を見ているのか、政治から文学を見ているのかによってそのロマン主義としての在り方は根本的に異なるが―に関して云えば、その評価の点においては全く相反した見解が見いだされる。ロマン主義運動が歴史的事実としてフランス革命に対する反動として成立し、王政復古の正統主義（レジティミズム）、メテルニッヒの神聖同盟のイデオロギーの形成に寄与したことは否定されないのであろうし、またその思想的根柢として、つぎに述べるとように、E・バークの『フランス革命の省察』から影響されたところ多大だったところであるから、保守主義―バークは保守主義の思想家の典型として一般に承認されている―の思想運動と批評される側面も大いに認められる。ドイツ・ナシヨナリズムの抬頭と直接関連をもった歴史主義―サヴィニ―の歴史法学派、F・リストの民族経済学―もまたロマン主義によって鼓舞された点が多く、自由主義と相対立する特徴を深めてゆき、全体として三月革命前の反動派の外観を呈している。しかしフランス・ロマン主義はこの時期には社会ロマン主義として急進化してゆく。フランスとドイツでロマン主義を別個のものとして理解すれば別だが、ロマン主義思潮として統一的に把握しようとする

と、矛盾が著しい。ロマン主義を反対に急進主義と同一視する思想史研究家もまたないではない。たとえばE・トルチュはつぎのようにロマン主義が革命であることを強調している。<sup>(一)</sup>『ロマン主義もまた一つの革命である。徹底したかつ真正の革命である。ブルジョアの気分のおていさいに対する、普遍的平等主義的倫理に対する革命である。西欧科学の数学的・力学的精神全体に対する革命、功利を道徳にまぜようとつとめる自然法概念への革命、普遍的かつ平等的人間性（Humanity）の裸の抽象への革命である。西欧的自然法概念の噴出とそれに伴う革命的嵐に当面してロマン主義はたえず増大する自己意識的發展傾向を全く相反する保守的革命的の方向へ追及した。』

自己矛盾の表現だが、ロマン主義者はよくこのようなパラドックスによって自己表現することを特徴としている。ノヴァリスは、バークの『省察』を革命反対のための革命的本<sup>(二)</sup>といい、ド・メートルもまた革命反対の革命を強調した（フランス論<sup>(三)</sup>）。つまり反動でもなく、保守でもなく、ただ大革命とは方向を異にした革命がロマン派の企図であることを明かにしようとしたのであろう。

このように政治思想の理解するロマン主義はそれ自体混乱していて、その諸特徴を綜括することはきわめて困難なほど、それは無体系、断想、エピグラム、詩であることをその発想方式にふくんでいる。しかも時間的に見た場合ロマン主義自体の発展段階に応じてその特徴もまた不連続的様相を示しているのだから、その全体としての特徴を概念的に把握することは一そう不可能に近いもののようにさえ見える。またドイツにかぎらず、イギリス、フランスにおけるロマン主義運動もまたそれぞれかなり相異なつた影響を政治に及ぼしているのであれば、とても私ひとりの努力によって結論をうるなどは望み得ないところであろう。ここでは課題の解釈のいとぐちを見いだす一つの手がかりとして、ドイツ・ロマン主義の時期区分を行い、その初期ロマン派の思想上の特徴を比較的方法的にその源流となつた外来的諸思潮との関連において究明することにしよう。後期ロマン主義は前者の変容であり、ロマン派に対する批判

はむしろ後者を直接に対象とし、そこから出発してロマン主義全体に対する評価基準としている場合が多いようである。このような構想に従ってドイツ・ロマン主義を見ると、それが形成される思想上の前提としていわば前ロマン主義 (Vor-romantik) が古典主義の中に発酵していったこと、フランス革命の勃発とその進行過程がするどい衝撃となつてロマン主義が一七九三—四年ごろから一八〇五年ごろのあいだにロマン派としての形態をととのえ、王政復古に至るまでの前期を形成することが指摘されよう。(Früh-romantik) 王政復古から一八三〇年ごろまでがその全盛であるがそこにすでに頽廢が進行し、政治的にも権力との結合が深まり、神政的性格を強めてゆく。それ以後ロマン主義は衰退、あるいはフランスにおける社会・ロマン主義としての更新を経験し、やがては自然主義、自由主義の中に吸収されてゆく。<sup>(四)</sup>

(一) Troeltsch on Natural Law and Humanity, (Otto Gierke, Natural Law and Theory of Society, Appendix) pp.209f.

(二) Barth, H., Idea of Order, contribution to a Philosophy of Politics. pp.23~4. Aris, R., History of Polit. Thought in Germany. p.270.

(三) Aris, R., *ibid.*, p.251.

(四) Baxa, Einführung in die Staatsw-rt der Romantik. SS.7—8

## II

前ロマン主義思想が啓蒙思想の中ですでに醗酵しつつあったことについては、まだ十分な証明をなしえないではないけれども、一応ルソーの思想、ヘルダーの思想などを検討したとき、十八世紀哲学の中にそれへの反逆として形成されつつあることに注意を喚起しておいた。合理主義的、形而上学的哲学に対する批判であるが、その特徴は理性に

対する感情の哲学であり、抽象に対する具象の反抗であり、幾何学的精神に対する繊細な精神であり、普遍に対する個別者の尊重であり、空間的に対する時間的な思惟が要請されつつあった。さらにまた近代精神から失われていった信仰復活の要望だった。フランス革命を推進していった哲学思想がこのような十八世紀思想内部の重大な変化に全く気づかなかつたとは云えないにしても、その主動的イデオロギーはもっぱら啓蒙哲学者(フィロソフ)によって支配されていたことは否定されないだろう。この革命思想の内部的矛盾が散文的権力奪取の実力政治の過程の中で、またはテルロ支配の現実の中で、反逆として爆発し、挫折・絶望感からの政治的転向、亡命あるいは革命批判の政治・文芸思想がロマン派として明確に自己形成をして行ったと考えることができよう。前ロマン派が啓蒙思想とのはっきりした対立を意識することなしに革命そのものによせていた人間性解放の期待が全くの幻想にすぎなかったこと、現実主義のもとにそれが革命にかけていた希望はうちくだされたこと、—これらのインパクトがロマン主義形成の直接の要因として探求されねばならない。ドイツ・ロマン派はフランス革命勃発の報に熱狂し、共鳴し、自由の木をめぐる乱舞した青年たちであって、古典主義の強い影響のもとにあった、いわば前ロマン派の人々だったことは否定されない。

まず第一にロマン主義運動の有力な源泉となり、ドイツ思想に大きい影響を及ぼしたハノーヴァ・ゲッチンゲンにE・パークの『省察』への同感を中心としたロマン主義グループが形成されたことに注目せねばならない。ハノーヴァは通商・外交・王室の関係をとおしてイギリスと密接な関係におかれており、同国に属するゲッチンゲン大学はアングロマニアに近い精神的雰囲気につつまれていた。この地方でE・パークの思想は—政治家としての言論活動が主であるが—一般によく知られていたし、彼の美学思想(『崇高と美の観念の起源について』)はガルフェ(Garve)によって紹介され、感情哲学の方向として注目をあつめていた。その友人F・v・ゲンツがパークの『省察』の訳

者、紹介者となったことは偶然ではないだろう。そしてゲンツこそドイツ・ロマン主義と不可分な關係に立っている人物となるのである。<sup>(一)</sup>

パークの思想が合理主義的啓蒙思想に対し明らかに批判的だったことは彼の美学論においてすでに表明せられていた。パークの政治思想なり、哲学思想についてここで詳論することは適當ではないし、またそれを行うには十分な研究が欠けているから、別の機会に譲らねばならないが、保守主義者としてのパークの哲学は十八世紀啓蒙思想に対してはすでに異質的なものを含んでおり、理性主義に対して、感情、情念、想像 (Imagination) の価値の再確認の必要を強調し、十九世紀への轉換を用意するものであった。たとえば美的価値を論ずるに当って彼は理性や推論を退りぞけ、感性 (Sensibility) から出発して、趣味論 (Taste) をその基礎においているが、それは合理的価値論から美を論ずる古典主義を批判する美学思想であろう。『吾々が、構成がすぐれているか、それともおとっているかについてあらかじめ推論することなしに、一目見ただけで自然と心をうたれるのは一種の本能である。想像と情念に関わることが、理性にほとんど相談をうけていないのがほんとうだと信じている。しかし配列、端正、均齊が問われているところでは、要するに最良の趣味が最悪の趣味から區別されているところでは、悟性が作用しており、それ以外の何ものでもない』と私は確信している。……熟慮による最良の趣味をもった人々は、無関心と懷疑への嫌悪から心が即座に形づくることを愛する初期の軽卒な判断を変えるようになる。趣味は、吾々が知識を拡大し、対象に絶えず注意し、訓練をかさねることによって、吾々の判断を改善するにともない、改良されることが正確に知られている。これらの方法をとらない人々は、その趣味を性急に決する場合、それはつねに不確実である。彼らの性急は……突然の輝き (irradiation) によるものではない。しかし趣味の対象をなすこの種の知識を教養 (cultivate) してきた人々は、次第に慣習的に健全さを得たのみならず、……判断の準備をもしたのである。<sup>(二)</sup>『感性と悟性との統一をパークはさら

に「一そう宗教的賛美の感情に近いもの、神的摂理への参与の中に求めている。『…吾々は主の作品を思慮することによって全能者の計画に参加することが認められよう。心の昂揚 (elevation) は吾々すべての研究の主要目的たるべきである。』」<sup>(三)</sup>

このような美論の中に示されたバークの感情哲学の方向は、彼の『フランス革命に関する省察』の政治的認識と批判の方法ともなっているのであって、プライス、プリストリーら急進派の自然権思想の立場からの革命観の、皮相的抽象、思弁的観念性への駁論の根拠ともなったのである。彼はイギリス憲法の問題が決して抽象的理念の所産ではなくして、祖先からの相続財産であり、古代への引照であり、摂理の贈物であることを明らかにしてきた。歴史的に形成されたイギリス的自由、イギリス人の権利は尊重されねばならないし、それらは『用益の制度 (Institution of beneficence)』として獲得されるに至ったけれども、抽象的自由、抽象的人権なるものは現実には存在しない。<sup>(四)</sup>

ところがイギリス憲法を模範として革命憲法の原理を制定したと自ら主張しているフランス革命派の人々は、ブリトンの生得の自由が実はイギリス国民の伝統的遺産であり、彼らの民族的偏見によって育てられ、蓄積された慣習の所産にはかならないことを全く無視している。<sup>(五)</sup> 『共同生活に入ってくるこれらの形而上学的権利は、密度の高い媒質をつらぬいてくる光線のように… 屈折されている。実さい人間の情念と関心との粗雑かつ複雑な大量の中においては、それらの本源的権利はかように多様な屈折と反射をとおってくるので、それらの本来の単純な進行方向がそのまま継続するかのようには語ることは不条理なことであろう。人間性は錯綜しており、社会の目的はありうるかぎりの複雑さをもっている。それ故に権力の単純な配列または指導は人間性にも人的事象の質にも適合しえないだろう。このたびの憲法 (『フランス憲法』) で機構の単純さがその目的とされ、誇りとされているのを聞くと、私は迷うことなしに、これら工人たちは自分たちの手職をほとんど知らないか、あるいはそうじて彼らの義務を無視していると、



きめつけるだろう。単純な政府は、これ以上さらに悪評しないにしても、根本において欠陥をもっている。もし諸君がただ一つの視点からのみ社会を熟考するとすれば、これらすべての単純な統治様式はかぎりなく魅力があるだろう。しかしある部分はきわめて精密に規定されてはいるが、他の部分は全く無視されているために、あるいはまた気に入った部分が過大評価されているために、実さい上の損害をこうむるよりは、不完全かつ変則的 (anomalously) であれ、全体が答えられるほうが一そうましだろう。<sup>(六)</sup>『つまり伝統的フランスの国憲、フランス的自由こそ革命憲法の原理として採択さるべきであり、それこそイギリス憲法に範を求める所以である』というのがパークのフランス革命批判の重点だったと云えよう。そしてこの賢明な時代認識がフランス革命の結果「ナポレオン独裁」を予言たらしめた所以であろう。

ハノヴァ、ラインランド地方はフランス革命のもっとも強い影響を受けた地域であって、革命への熱烈な共鳴者たちも多かったのであるが、これらの急進派にとってパークの『省察』は背教者、反革命に買収されたその手先の著作としてはげしく非難された。一七九二年ジャコバン・クラブの例にならって、『自由平等友の会』をマインツに設立し、ラインランドにおける熱烈な共和思想宣伝の中心的活動家だったG・フォルスターは、『一七九〇年におけるイギリス文学』というノートの中でこの著作に関する印象をのこしているが、それによると、なるほどイギリス憲法への賛美は当然彼の承認しうるところであるが、パークのフランスにおける状況分析の点についてはフォルスターは嘲笑をもってこれを非難している。『革命は自然的正義の事業とみなされねばならない。僧侶と貴族は議会の智慧あるいは愚鈍によってではなしに、彼ら自身の無能力によって打倒されたのである。』彼の友人ヘイネへの手紙の中でもフォルスターは『省察』について、『うすいかゆで、ドイツにとっては一こうに役に立たない。』と述べた。<sup>(七)</sup>フランスの革命的諸事件に関する討議にその大部分のページをさいた共和主義者アルヘンホルツの『ミネルヴァ』でさえバ

ークの見解を画期的と認めるいかなる兆候も示してはいなかった。彼はパークを政治哲学者としてではなしに、反革命的活動の点でウィトンの政論家ホフマンにもくらべられる政治的アシテーターとしてのみ見ていた。<sup>(八)</sup>

しかし一七九三年になると『省察』の訳書も三種類ほど刊行されたし、*Jenaer Allgemeine Literaturzeitung* には A・レーベルグの紹介、*Goettingische Gelehrte Anzeigen* には E・ブランドスの書評がそれぞれ発表された。

彼らは革命に関する著作においてフランス人における諸事件の恐怖と不信を指摘し、革命への反対を表明していたがそこには明らかにパークの理論の諸特徴が刻印されているのを認めることができる。二人ともハノウアの高官として、イギリス事情に通じていたし、個人的にもパークとの交渉をもっていた。<sup>(九)</sup> プロシアの改革者 V・スタインは、友人レーベルグを介してパークの思想に接触していた。『この偉大な経験ある高貴な政治家は、熱心かつ激越な雄弁で、フランスを荒廃せしめつつあった形而上学的政治学 (*metapolitica*) の革新者たちに対し、市民的、宗教的自由の大義を「フランス革命の省察」の中で防衛した。』と述べて、政治的秩序と市民的自由との綜合に彼の改革原理を見いだした。<sup>(一〇)</sup> W・v・フンボルトもまたパークのこの著作によって強い影響を受けたことを自ら認めている。(一七九三年一月一八日、シラーあての手紙)<sup>(一一)</sup>

パークの弟子 F・v・ゲンツもまたこのような知識人グループの一人として活動し、パークの著作の訳によって、彼自らその支持者であることを宣言した。そのゲンツも他の知識青年とおなじくフランス革命勃発の当初においては自分を革命の友と呼んでいた。<sup>(一二)</sup> (一七九〇年ガルフェあての手紙) しかしおなじガルフェへの手紙で彼は革命的諸事件のきびしい批判者として現われている。(一七九〇年十二月五日) 『私はフランス革命の失敗を、人類にふりかかった最大の不幸の一つだと考えるでしょう。革命は哲学の最初の実践的勝利であり、原理と統一的思想体系の上に立てられた政体の最初の手本である。それは希望であり、人類がそのもとで苦吟している多くの古代の災禍に対する慰めである。』

この革命がしりぞけばこれらすべての災禍は十倍以上も医しがたいものとなるだろう。私は目のあたりに想像することができるといふところでは絶望からの沈黙が、理性に反して、人々は奴隷としてのみ幸福になることができると、どうして認めるのだろうか。また大小の暴君が、目ざめたフランスの心情にたたきこまれたこのおそるべき是認を、いかにしてテロルへの復讐に利用するかを。<sup>(一三)</sup>彼は一七九八年にははっきりとフランス革命反対派にかわってしまった。『のろわれた政府の地獄のような僭主支配』と彼は友人ガルフェへ書きおく<sup>(一四)</sup>ている。心の底まで合理主義者であり、カントの弟子であったゲンツが、ロマン主義政治思想家アダム・ミュラーを援助し、親友としてロマン主義の形成に努力するようになったのは、むしろ政治家としての彼の実践目的——ヨーロッパ的均衡体制の確立を妨害した行きすぎた革命への解毒剤として、ロマン主義の歴史的有機的政治論のもつ有用性を考えたからであろう。この点においてゲンツは真正のロマン派に属する人ではなかった。むしろバーク思想の紹介によって、そのロマン主義との交渉を深める役割を果たしたのである。<sup>(一五)</sup>

ロマン派の代表的思想家として知られるF・V・ハルデンベルグ（ノヴァリス）が『省察』を熱狂的に歓迎し、バークの「第一の弟子」としてそこからノヴァリスの政治哲学の原理——詩的国家観——を汲みとったことは、彼のロマン主義がメーザー、ヘルデルとともにバークから計り知れない影響を受けたことを物語っている。ノヴァリスは『多くの反革命的著作が革命のために書かれたが、バークは革命反対の革命的著作を書いた。』と断想の中でパラドックスとして述べたが、バークの情緒主義、衝動主義によって強い印象を与えられ、<sup>(一六)</sup>また彼の抽象的定義、原理に関する不信と歴史および宗教に関する観念の中に、ロマン主義思想への入口を見いだした。バークの真の弟子、あるいはむしろ『有望な息子』と自ら任じていたアダム・ミュラーが、ドイツ・ロマン主義の政治思想の中心として欠かすことのできない思想家としての役割を演じたことは、バークの思想がロマン主義の重要な要因であることを物語るものであ

ろう。A・ミュラーにとってバークは、偉大な革新者、近代政治学の創始者だった。『対立論』（Die Lehre vom Gegensatz, 1804）の序文の中で彼はバークを、『イギリスおよびおそらくはヨーロッパが自己の救済を負うている』人物と評価している。『フリートリック二世論』（一八一〇年）の中ではミュラーは、バークは『最後の予言者としてこの迷夢から目ざめた世界へ入ってくることになるだろう』と述べている。『ドイツの学問および文学に関する講義』（Vorlesungen）の中でミュラーはバークの思想がドイツにとって、ことにロマン主義にとって重要であることを証明している。『ドイツ政治学史上もっとも重要な時期はE・バークのドイツへの紹介であって、彼はあらゆる時代、あらゆる国民のうちで最大、もっとも深刻、もっとも強力にして、人間的かつ戦斗的政治家だった。彼が味方しているこのドイツ精神を認識した、あれら少数者のあらゆる希望を彼は振るい興させた。（私はむしろ彼をドイツ的と呼びたいが、そのわけは私の中に発見した吾々の祖国との精神的類縁性の故にである。しかし彼が全世界を表現し、把握していること、彼はより一そう緊密に自分の愛する祖国に属していることを忘れるものではない。）……吾々が彼の精神によって生活し、書き、教育しているのに、海外では彼は知られないままにのこされ、彼自身の祖国はただ半分しか彼を理解してはいないし、ただ活潑な弁士、政党指導者、愛国者としてのみ彼を賞讃しているにすぎない。私は誇りをもって云うが、彼はイギリス人よりも、より多く吾々に属している。国家に関する私自身の観念は未成熟たることを誇りにしているが、しかし彼の精神の有望な子（いなむしる孫）である。彼はドイツでは、自由と法とのあいだの、力と労働との分離と統合のあいだの、中産階級と貴族制とのあいだの、もっとも有能かつ成功をおさめた仲裁者であると認められている。かくて彼の行為がイギリスにとっていかに有用であるかは別として、彼の賛歌をうたうのはドイツの特権だった。将来の著作、生命をしてこの賛歌をつづけるに値するものたらしめよ。』<sup>(二七)</sup>それにもかかわらずバークの哲学・政治思想は、ドイツ・ロマン主義とは内容上かなりの相異があるし、むしろ

るイギリス的なものを特徴としていたことは否定されないのではないだろうか。しかしバークが前ロマン派精神においてロマン主義を用意し、その形成に重要な要因となったことは否定されえないだろう。

ドイツ・ロマン派精神の形成へ強く影響した思想家グループとしてフランス革命からの亡命者の思想的交流もきわめて重要な役割をもったと考えられる。ゲーテの『ヘルマンとドロテア』はその一つの例として考えられるだろう。比較思想史の課題としてこのような亡命思想の研究は、ロマン主義研究の上に欠くことのできない一つの分野を提示するであろう。このような視点に立つとき、リヴァロール、セナンクール、ノトディエ、シャトオブリアン、ド・スタール夫人、B・コンスタンのような自由主義者のグループ、ド・メーストル、ド・ボナールらの正統派グループなどの亡命者のドイツ・ロマン主義との交渉を追求することは、フランス革命の動向を理解する上にも大切なことになるだろう。

一七九二年に亡命し、ブリュッセル、ロンドン、ハムブルグ、ベルリンへその住居を転々と変えることを余儀なくされたアントアンヌ・リヴァロールは—その途中ロンドンでバークと会う機会を得た—革命的事件の分析と説明とを『*Journal politique national*』の中に発表した。彼の革命に関する判断、フランスおよびヨーロッパについての予後については、バークの意見とはばおなじであることをそれらから知ることができる。一七九一年リヴァロールの弟クロード・フランソアあての手紙の中でバークはつぎのように述べている。『…あなたの兄上の賞賛すべき記事を拝読しましたが、残念ながら時機を失して利用できませんでした。いつかはそれらはタキツスにもならぶものとされるでしょう。吾々の思考方法には類似があると考えます。このことはあなたにとっては重大であるだけに、生意気に思えるでしょうが。もし私が同じ主題について書くまえに、これらの記事を読むことができたら、吾々が共通に持っている思想をわたくし流リュウに表現するまえに、このすばらしい著作からの多くの引用によって私の著述をゆたかに

したことでしよう。<sup>(二八)</sup>『リヴァロールにとって革命は新しい宗教、『あらゆる原理に対する叛乱』であって、『哲学的民族的宗教』を根拠とするものであったが、パークにとってもまた『今日の革命は、かつてのヨーロッパにおこった、ただ政治原理にもとづく革命とは全く相異なる性格、記述をもち、それらとほとんど似ていないように見える。それらは教理 (doctrine) と理論上のドグマの革命である。<sup>(二九)</sup>』リヴァロールが宗教の復活と云うとき、それはド・ボナール、ド・メーストルのカトリシズムの復興とは一致していなかったように考えられる。フランス革命とそれを用意した合理主義に対してリヴァロールのとった立場は奇妙な反対感情併存 (ambivalence) であって、この合理主義こそ彼にとって最初の、もっとも困難かつ最大のつまづきものとなった。これほど革命の過程において完全かつ決定的に疑問となったものはない。革命は情念の爆発であって、暗い、カオスの反合理的力が明るみに出て、革命の指導者を責任ある地位から追い立て、大衆のあやつりに転化する。ド・メーストルもまた『革命を人が指導したのではなく、革命が人を指導した』と云うのは正しい。：革命を指導しているように見える同じ悪党が：単なる道具にすぎないもののように見え、彼らがそれを支配することを主張しはじめるや否や、彼らは不面目にも没落する。』と述べている。(Consideration) リヴァロールは、あらゆる革命の事実のなかに合理主義的人間学とはっきり相矛盾する一つの力の早期の表明を見いだした。彼のノートは革命の根拠である理論に彼が反対であることを明らかにしている。『偉大な形而上学者シェーエスは：世界の女王である普遍的理性の狂気じみた公理を定立したとき、形而上学のあらゆる原理を転倒してしまった。彼は情念と無知の結果とに関する理論をまったく見すごしてしまった。』彼は情念論を不可欠と見ているし、その上理性によって規定される人間の見地を放棄して、情念からおこる非合理的、かつ反合理的支配欲 *libido dominandi* を措定している。リヴァロールが意図したことは、かような情念の力へ屈服することではなくて、その専制から人々を救い出す観念の媒介力を発見すること、そして啓蒙によって無視されてしまった『全

人』(whole man)に語りかけることだった。啓蒙は部分を全体と見ることをより一そう好んでおり、かような危険な一面性によって政治共同体の健全な理論の形成を妨げている。かような理論こそ伝統的憲法を根拠とする君主政のそれではなければならない——と彼は主張している。<sup>(10)</sup>リヴァロールの根本思想は、すでにルソーにその先駆者を見いだした前ロマン主義の情操論によって用意されていたのではないか——と考えられる。

この点においてスタール夫人の文芸・政治思想もまた前ロマン主義の典型であり、その立場からナポレオン支配へ抗議し、スイスのコペへ、やがてはペテルブルグ、ストックホルムへの亡命を彼女は余儀なくされる。彼女の前ロマン主義は、『ドイツ論』で述べられているように、ドイツ精神との接触によって十八世紀啓蒙思想からの袂別が決定的となった時点で確立されたという解釈が多いけれども、ルソー以後の *préromantisme* が革命の過程の中で一そう明らかに意識されるようになり、それがコペーワイマールの交通をとおして、たとえばシュレーゲル兄弟のロマン主義に強い影響を及ぼし、また逆にスタール夫人やB・コンスタンの感情主義をも深めてゆく上に役立ったと云うことができよう。<sup>(11)</sup> 革命の中にロラン夫人は『聖者の危機』を見いだしたが、彼女のかような神秘主義的宗教観はすでにマノン・フィリポンとしての彼女の少女時代の詩的、自然的感情の中に育まれていたところのものだった。孤独と内省の瞬間に彼女は摂理のルソー的賛美にふけり、パリ近郊の散歩でも彼女の心は優雅の行動にまで高められ、主との感動的対話である祈りへと昇るのを感じるのであった。それはまさにルソー哲学を想いおこさせるものであり、またシャトープリアン、ラマルティヌのロマン主義的汎神論(*Pantheisme romantique*)を予言するものだった。<sup>(12)</sup> スタール夫人がシャトープリアンとともに前ロマン主義の中心をなしたことは——後者は完全に十九世紀ロマン主義者となるのであるが——このような精神的環境においてであった。<sup>(13)</sup> 彼女は抽象的悟性を拒否して感情的思弁的空想的破片から人間性(*humanité*)を再建しようと試みている。それは魅力ある大胆さであって、復活のため、誕生それ自体のために

人々が行う『微妙な、心をひく、勇ましい』それである。精神 (l'esprit) であるよりも、素朴な自負心からの運動であり、飛躍であり、熱中であって、かつドイツ的—冥想的であり、思弁的であり、道德的—でもあり、それらはスタートル夫人の性質に適合しており、偉大な哲学者を仲介として彼女の夢想したところだった。つまりカント—彼はあらゆる点においてルソー哲学の追随者だった—から義務 (devoir) の概念を学ぶことによって、自由意志、魂の精神性 (spiritualité de l'âme)、人間の特殊な力としての徳、これらすべてからの論理的帰結としての魂の不滅性 (immortalité) の諸観念に導かれるのである。『…魂を外の客体の力から解放すること、吾々の王国を吾々自身に位置づけること、そしてこの王国に法として義務を、報償として他生を与える。』が彼女の哲学思想の概要だった。<sup>(三四)</sup>

しかしそれはキリスト教とどんな関係に立っているのか。それはサヴォヤ神父の信仰に似た、異説的、理性的キリスト教であって、教会教理に權威づけられたキリスト教ではない。しかしそれは分裂し失われた信仰の復活を目ざす一つの方向であって、彼女は『文学論』の中で『いかなる哲学的体系が』九三年の勝利者と敗北者とを共通の意見の中へ再統合し、包含するだろうか—を問うた。かってキリスト教がローマ的世界と野蛮の世界を統一したように。スタートル夫人のキリスト教は、『感情を理念から隔離するところのものでは少しもなかった。』カントの至上命令<sup>イムペラチーフ</sup>は、冷たい、抽象的概念でなく、怒り、慈愛、自尊の感情の声、良心の声に訴えて吾々に話しかけるところのものであり、神への愛を根拠としている。スタートル夫人はかくてある宗教上の教理—ドイツ哲学によって発酵させられ、純化された—『熱狂の宗教』 (religion de l'enthousiasme) に到達する。それはいわば神秘的に、心の声に耳を傾ける、吾々とともにいます神の永遠の啓示を信ずること、この啓示を魂の高揚それ自体の中に、それが聞き従う絶対的確信の中に認めること、この高揚それ自身によって、吾々と神とのあいだの永遠の対話を保つこと。『もっとも崇高かつ奥深い理念は、この宗教の人間本性との独特な一致を発見することに帰する。』<sup>(三五)</sup>



スタール夫人のカント哲学の理解については、在独カント主義者シャルル・ド・ウイレルの仲介によるところ多大であることは認められるが、そのことからドイツ・ロマン主義の形成に夫人の思想的展開はなんら寄与するところはなかったとは云えないだろう。彼女はフランス人にドイツ思想を紹介しようと努力したわけであるが、さらにそれ以上にドイツ人に民族的情操と統一した行動の願望をよびさまそうと努めていた。それはナポレオン支配に対し自由主義的ナショナリズムを呼びかけることだった。<sup>(二六)</sup>それはいわばドイツ古典主義の精神から距たること、そういぢるしいものではなかったけれども、A・Wシュレーゲルの文芸活動に対し、したがってまたロマン主義思想家としての派の中心となったF・シュレーゲルに直接の励ましと、支持を与えたことは否定されないだろう。

ドイツ・ロマン主義思想の形成については今述べたように、ドイツ古典主義、あるいはストルム・ウント・ドラングが、どのような形体でロマン主義を育成し、それを自分から分離させるかについて考察せねばならないが、この第三のグループについては、つぎに述べるロマン主義の諸特徴を明らかにしてゆくなかで、当然古典主義からの区別を論ぜねばならないのであるから、その項でとりあげよう。メーザーや、ヘルデルの思想が前ロマン派としてその用意をしたことについては他の箇所すでに述べておいた。<sup>(二七)</sup>

- (一) Schmitt, C., Politische Romantik. SS.58~61.
- (二) Burke, E., A Philosophical Enquiry into the origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful. (Ed. by J.T. Boulton.) pp.26~27.
- (三) Ibid., pp.52~53.
- (四) Burke, E., Reflexions on the French Revolution. pp.64~5.
- (五) Ibid., pp.66~7; p.97.

- (六) Ibid., pp.97~8.
- (七) Gooch, C.F., *French Revolution and Germany*. pp.305~306; Kohn Hans, *Prelude to Nation-State*, p.135.
- (八) Aris, R., *Ibid.*, pp.253 ~54.
- (九) *Ibid.*, pp.255~56. Schmitt, C., a. a. O., SS.58—60.
- (一〇) Barth, H., p.24~25.
- (一一) *Ibid.*, p.29.
- (一二) Aris, *ibid.*, 258.
- (一三) Kohn, *ibid.*, p.133~34.
- (一四) Aris, *ibid.*, p.258.
- (一五) *Ibid.*, pp.246~65.
- (一六) Aris, *ibid.*, pp.264~71. Barth, *ibid.*, p.30; Schmitt, a. a. O. ss.180~81.
- (一七) Barth, *ibid.*, pp.30~31.
- (一八) *Ibid.*, p.53. (Correspondence of E. Burke, ed. by Fitzwilliam, 1844, III, p.207.)
- (一九) *Ibid.*, p.58—61.
- (二〇) *Ibid.*, pp.70~71.
- (二一) Fagnat, *Pensée politique et moralists in 19 siècle*. pp.150~53.
- (二二) May, Gita, *De Rousseau à Robesp.* pp.129~30.
- (二三) Tieghem, P., *Romantisme française*. pp.6~14.
- (二四) Fagnat, *ibid.*, pp.152~55.
- (二五) *Ibid.*, pp.155~57.
- (二六) Kohn, H., *ibid.*, p.127.
- (二七) 『近代ナショナリズム思想の形成』（具島先生還歴記念論文集『ナショナリズムの政治学的研究』所収）

ドイツにかぎらずフランス・イギリスにおいてもロマン主義の形成はむしろ前ロマン主義の中で醸成され、それから明白に自己を区別してゆくところに可能とせられる。それならばその特徴は一体どこにあるのか、ことに相対立する啓蒙思想、自然法との区別自体はかなり明らかなのだが、前ロマン派—ドイツの場合ゲーテ、シラーの古典主義、あるいは哲学の領域においてはカント、フイヒテ哲学とシェリングを先頭とするロマン派哲学との相異と云うことになる。それはほど明確ではない。それが後期ロマン主義ということになると、より一そう幻想的、神政的イデオロギの性格を深め、むしろ本来のリズム感、行動性を失って保守主義への傾斜を強めてくるようになる。王政復古または神聖同盟のメテルニツヒ的正統主義 (Legitimism) ときわめて密接な関係をもってくるのであって、一八四八年革命の視点から見るとまさに反動主義そのものにはかならない。保守主義、反動主義はよく同一視して用いられるけれども、それ自体前者が形式・齊一・均衡・実用を内容とするのに対して、後者は行動・対立・激変・危機を追及するなど、相異している概念であって、状況に対応してロマン主義の複雑多様な諸断面が示す反映を説明する上に役立ちはするけれども、それでもって万事こと足れりとするわけにはゆかない。このようにロマン主義は無構造、無体系であって、メタモルフォシスの状況追隨をその特徴としている。いやむしろそれ自体合理主義的体系と論理構造を否定的に反射することによって自らの夜の世界のあわい輝きと陰影を中空にかけている非合理の月影にひとしいようなものである。あるいは因果関係の法則の世界とははつきり異った、マールブランシュ的偶因 (occasio) の世界がロマン主義の発想の根拠であることを強調する見解もある (カール・シュミット)。ゲーリンクス、マールブランシュの形而上学は、伝統的キリスト教神学を保持しながら、世界とそこに生じているところのものは、なるほど一つの誘因 (Anlass) にすぎないけれども、秩序と法則とが再び見いだされるところの神への誘因である—とする偶因論を主

張した。この思想は神存在を外面的力学的に *deus ex machina* として解決し去るのではなく、より高次の有機的統一の中に精神・物質の二元論的対立の解決を求めめるものである。その二元的対立が真実である本質なきもの (*Wesenlose*) へ消滅し去るところに偶因論の神の本質が存している。ロマン主義者にとって『有機体』はただ対立物へ両極化するというのではなくて、偶因論的に『より高次の第三者』が対立物を止揚し、しかも相対立して集団化している事物は『より高次の第三者』にあって消滅し去り、かつ対立がこの『より高次の第三者』の誘因となるのである。性別は『全人間』 (*Gesamtmenschen*) の中で、個人の対立はより高次の有機体—『国家』または国民の中で、諸国家の分裂はより高次の組織である教会によって止揚される。対立を、自分のより高次の、唯一の活動の誘因として利用する力をもっているところのものは、偶因論的に、真の、かつより高次の実在性 (*Realität*) である。<sup>(1)</sup>

ロマン主義の近代主義との相異、ことにドイツ・ロマン主義はいかにして古典主義から分離し、それに対立するに至ったかを明らかにすることは、ロマン主義の特徴を理解する上に重要であるが、現在の私の研究状況からははっきりした結論を導きうる段階ではないので、一般にそのようなものとして指摘される若干の諸要因を列挙して検討の便宜に当てよう。

(一) 主体的自我の客観的非我に対する支配であって、フイヒテ哲学が観念的に現実の世界を克服することを企図するところから出発したのであるが、客観からの脱出が現実の重みのために、幻想の世界の中のみ、ロマンチック・アイロニーとして可能とされているところに、古典哲学へのロマン派の幻滅が感じられる。フランス革命への期待の挫折とドイツの現実生活の重圧は自我の天才的飛翔をただ幻想の世界でのみ可能としたのである。

(二) 悟性的、思弁的論理の拒否であって、美的認識に関しても分析的形式的理解にかわって、直観的・総合的・詩的把握をたえず追求している。ドイツ古典主義の特徴がカントの判断力批判、シルレルの美学論に求められるよう

に、美認識の大きい変革が前ロマン主義の中で進行していたことが、ドイツ・ロマン派の誕生に著しい影響を及ぼしたことは否定されないだろう。しかしロマン派の詩的創造の衝動はストルム・ウント・ドラングの教養主義、形式主義からの決定的分離であり、体系的ではなしに断想的、理知的ではなしに行動的であって、その点で古典派精神と異ったロマン派の特徴が求められるだろう。

(三) このような創造活動を芸術の世界のみならず現実社会において推進してゆくものは、非合理的情念であって、理性ではなしに悲劇的、盲目的個別者の破滅、デーモンのなものを媒介として自己を実現してゆく何ものかである。A・W・シュレーゲルによってシェクスピアがドイツに紹介され、シェクスピア復活がこのドイツにおいて始められたという事実は、ロマン主義のこのような特徴を十分に説明するに値いするだろう。

(四) 有機観・生命観であって、機械論的因果関係を否定し、内在的要因による生成過程を重視する自然観である。合理主義的認識が全く無時間的であるのに対し、この有機観的認識は時間の要素を導入した点において古典哲学との本質的差異を自然観に加えるものであって、ロマン派哲学としてのシェリングの自然哲学の重要性がそこに見いだされる。このような時間論が社会・政治の領域に投影されて、歴史主義的視点が、啓蒙的自然法思想に対する根本的変革を可能とし、ロマン主義を十九世紀思想たらしめるのである。

(五) ロマン主義的生産力の考え方であって、二律背反(アンティノミー)、ポジティブ対ネガティブの対立物の斗争と、そのより高次の存在物への統合が、主観的構想力の内容として把握される。対立というのは、たとえば生命的対機械的、有機的対無機的、持続的対破壊的、歴史的対恣意的…などであって、アダム・ミュラーの基本的観想であって単純な均衡を退けている。しかしより高次の総合はヘーゲル弁証法の云う止揚ではなくて、ただ主観的・想念的世界における恣意的総合の域を出ないのであって、その対立は必然的客観的モメントを内包しているものではない。

これらの諸特徴が政治の領域に投影される場合、ロマン主義の政治思想は、散文的政治と戯むれ、それを材料として自分の趣向に合致した詩的世界へ断片的・短詩的にそれをつくりかえてゆく政治的ロマン主義となって発酵させられる。それはナショナリズム、歴史主義法学思想ときわめて密接な関連をもっているけれども、そのものの中へ解消し去るものではない。政治的ロマン派が政治運動の随伴者視される所以である<sup>(三)</sup>。不十分な原稿であるが、「総合研究」テーマの課題を分担するものとしてその責任の一端をふさぐこととする。

(一) Schmitt, C., Politische Romantik SS.122~27.

(二) A. a. O. SS.144,127~29.

(三) A. a. O. SS.222f. 「ドイツ・ロマン主義ははじめに革命をロマン主義化し、ついで……王政復古をロマン主義化し、

一八三〇年以後にはそれは再び革命的となった。アイロニーと逆説にかかわらず終始かわらぬ依存性が示されている。その特殊な生産力のせまい範囲の中に、すなわち……音楽的・詩的なものの中に主観的偶因論は自由な創造者の性格の小さな島を見いだすだろうが、ここでも彼は無意識のうちに、もっとも身近かな、かつもっとも強い実力のもとに屈服し、ただ偶因的に考えられる現代への超克は最高のアイロニー的転倒を耐え忍ぶことになるだろう。すなわちあらゆるロマン主義的なものは、他者の非ロマン主義的エネルギーに奉仕し、定義と決定の克服は他者の力と他者の決定の有用な同伴者へ転化する。」